HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ヘルマン・ヘッセとマウルブロン
Author(s)	高橋, 修
Citation	独語独文学研究年報, 31, 162-175
Issue Date	2004-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/26166
Type	bulletin (article)
File Information	31_P162-175.pdf

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

ヘルマン・ヘッセとマウルブロン

高橋　修

はじめに

ヘッセとマウルブロンと言えば、多くの人が思い浮かべるのはまず『車輪の下』における強烈な教育制度批判であろう。ヘッセはそこで、マウルブロン神学校をも含め、当時の教育の風潮を一絡げに個を圧殺するものとして断罪している[1)]。

しかしヘッセの精神遍歴にとってマウルブロン体験が果たした役割はそんなに単純なものではなかった。建物自体、中世以来のヨーロッパの精神的伝統を象徴するものであり、そしてそこで受けた教育によって開かれた古典の世界への視界や、友人たちとの生き生きとした交わりの体験は、後のヘッセにとっての一種の礎石の役割をも果たしているのである。

ヘッセとマウルブロンの出会いは不幸なものだったが、そこで担わされた課題の意味を一生問い続けた結果得られたものは、思いの外広々とした歴史観であり、彼岸を含めた世界の全貌へ向かっての一つの展望であったとも言えるのかもしれない。そうした経過を、この論文で辿ってみたい。

神学校時代のヘルマン・ヘッセ

ヘッセがマウルブロン神学校に在校した期間は、1891 年 9 月 15 日から 1892 年 5 月 7 日まで、8 ヶ月弱である。その間 3 月 7 日には、有名な逃走事件を引き起こしている。ところで、『車輪の下』の内容を投影すると、ついついヘルマン・ハイルナー同様にヘッセは常に教師たちと衝突を繰り返していたのではないかと思いたくなる。しかし、この想定は誤っている。少なくともヘッセは、教師たちとの衝突が募って脱走に至ったのではなく、むしろ発作的に脱走してしまった帰結として他に悪影響を与える生徒とみなされるようになり、教師たちとの軋轢が高まった、と捉えた方が事実に近そうなのである。

9 月 15 日にマウルブロンに着いて以来、ヘッセはほぼ週末ごとに両親に近況報告の手紙を出しているのだが、それを辿ると、当時のヘッセの学校生活が非常に多彩で活気に溢れたものであったことが見えてくる[2)]。友人を作り、ホメロス等、古典の世界に心酔し、ある湖畔が気に入って頻繁に訪れたり、催眠術騒ぎに関わって教師たちに怒られたり、得意教科や嫌いな教科についても結構のびのびと叙述し、火事の消火

等を手伝うことで大きな体験を得たり、自ら音頭を取って文芸サークルを設立し、週一回シラーの作品等を朗読したり‥‥。ここに逃走事件の予兆を読みとることは、少なくともこれらの手紙の読者である家族の視点からは難しかっただろう。

一人の友人との交わりに焦点を当てつつ、ヘッセの神学校生活の雰囲気の推移を素描してみよう。神学校時代を通して、ヘッセにとっての最大の親友は同級生のヴィルヘルム・ラング[3]だった。両親への11月30日の手紙で既に親友として紹介されており、彼が風邪を引いた折には数日間殆ど自由時間毎に付き添うなど、なかなかの熱の入れようである。晩に二人だけで修道院の建物に出かけ、月光の差す聖堂の中で詩的空想を開陳するようなことも習慣となっていたようである[4]。2月14日の手紙でヘッセは友人たちを一人一人手短かに生き生きと描写しているが、ラングについてはこんな風に書いている[5]。

Am meisten natürlich gehe ich mit meinem Freund Wilhelm Lang um: Der ist fleißig, hat an seinem Pult inskribiert: "Ora et labora!" Er ist praktisch wie nie einer, kann aus einem Brettchen, einer Schnur, Papier etc Alles Erdenkbare machen. Er zeichnet besonders Ornamente sehr nett, liest viel Schiller, ist das Muster eines Schülers. Er ist wenig kleiner als ich, ähnlich gekleidet wie ich, hat ein nettes frohes Gesicht und trägt Stehkrägen. Er hat immer Äpfel und Butter, woran ich viel, sehr viel verzehren helfe. Er hat eine schöne Handschrift, führt den FISCUS der Promotion und ißt Samstags seine Bratwurst immer nur halb. Er ist ein wenig zurückhaltend, sehr friedliebend und kämpft wenig.
もちろん一番つき合いが多いのは我が友ヴィルヘルム・ラングです。彼は勤勉で、机に「祈り、そして働け！」と書き込んでいます。誰にも増して手際がよく、板、ひも、紙といったものから考え得る限りのものを作ることができます。特に彼は装飾模様を描くのがとても上手で、シラーを沢山読み、模範的な生徒です。背は僕より少し低く、僕と同じような服装をしており、感じのいい陽気な顔をしており、立て襟の服を着ています。彼の所にはいつでもリンゴとバターがあり、その消費を僕はかなり手伝っています。彼の筆跡は美しく、クラスの会計係で、そして土曜日には自分のソーセージを半分しか食べません。彼は少し控えめで、そして平和を愛し、けんかはあまりしません。

ヘッセが様々な事件を引き起こす困り者的な存在だったのに対し、ラングの方は受け身でおとなしく、どことなくハンス・ギーベンラートを思わせる人柄であったことが伺われる。本当に気を許しあった友情関係だったようだが、しかし、その頃週一回集まっていた文学サークルの活動との関わりではラングの名前は出てこない。むしろそういう場での活動の緊張をほぐしてくれる面で、ヘッセにとってはラングとの関係は貴重だったのかもしれない。

ところがそこに3月7日の出来事がやってくる。ヘッセは計画性もなしに、次の授業の教科書等を抱えたまま神学校を脱走し、一夜を野外で過ごして翌朝保護されるのである。神学校内は大騒動になって探索が行なわれ、カルプの実家にも電報で知らされた。3月10日に教員会議が開かれ、動機は何だったのか、これからどう扱うべきかについて議論が行なわれた。その結果、計画性はなかったことが確認され、罰は禁固室刑8時間と、教師側の見方からすれば比較的軽いものとされた。しかし、振り返ってヘッセのそれまでの生活の色々な問題性が浮き彫りにされ、この学校に居続けることは誰のためにもならないという判断が下される。ヘッセの両親にも自発的な退校が勧告されるのである[6)]。

ヘッセはこうしていわば烙印を押された生徒となり、周囲から白眼視される立場となる。そんな中で、ヴィルヘルム・ラングだけは彼を見捨てなかったのだが、それにもついに終わりが来る。3月20日のヘッセから両親への手紙を見てみよう[7)]。

Das Schwerste mußte ich gestern erleben, den Abschied von meinem Wilhelm, der mich so ganz verstand und kannte, der nach meinem Fall noch den sonst Verachteten liebte und Freud und Leid mit mir teilte. Trauernd gab er mir gestern einen Brief seines frommen und biederen Vaters zu lesen, der mir deutlich zeigte, daß ich auch von Wilhelms Eltern verachtet werde, und dessen Inhalt so ziemlich der Befehl zur Trennung war. Es war ein schöner Abend, der Mond schien in die alte Halle, wo wir in Gespräch dahinschritten. Ich habe den verloren, den ich mehr liebte als alle, dem meine Freizeit, mein Singen und Denken gehörte.

もっともつらいことを僕は昨日体験しなければなりませんでした。それは、ヴィルヘルムとの別れです。彼は僕のことを本当によく分かってくれ、あの事件後も、他の人からは軽蔑されている僕をなお愛してくれ、喜びも苦しみも分かち合ってくれていたのに。昨日彼は悲しそうに、敬虔で実直な彼の父からの手紙を僕に渡して読ませてくれました。その手紙は、ヴィルヘルムの両親も僕を軽蔑していることを明瞭に示しており、その内容は、殆ど僕から離れろという命令に等しかったのです。美しい夕べで、僕たちが話しながら歩んだ古い大広間には、月が照っていました。僕は、他の誰よりも愛し、僕の自由時間と歌と思考を捧げた人を失ったのです。

以後ヘッセの心の荒廃は進み、折角の春休みも、花火の扱いを誤って危うく失明しかねない火傷を負って学校へ戻るのが1週間遅れるなど、一向に軌道を修正できる見込みは立たない。5月上旬には、ベットが隣のオットー・ハルトマン[8)]に「殺す」と宣言してとびかかるという奇行を犯す。ハルトマンは両親に相談し、そこからさらにシュトゥットガルトのヘッセの親類に相談が行ったことから、いよいよヘッセの両親も息子をこれ以上神学校にいさせてはならないと決断する。5月7日、ヘッセは母と

兄に付き添われて、バート・ボルのブルームハルト牧師の営む施設に送られる[9]。その後も軌道を外れた行路は収まるところを知らず、およそ1年半にわたってヘッセの生活は荒れ狂ったものとなった。

ヘッセとラングの物語にはエピローグが付く。他の神学校生たちとのその後の関係を見ると、ヘッセとの関係を最も早く回復したのはテーオドア・リューメリン[10]だったようで、彼は1893年8月には既にカルプにヘッセを訪ねている[11]。彼の仲介で他の同級生たちにもヘッセの近況が伝えられ、1894年には何人かとそれなりの文通が行なわれるようになるのである。ところで、友を裏切ったことで自分を責め続けていたラングも1895年1月26日に、当時学校に通っていたブラウボイレンから初めてヘッセに手紙を送り、急速に友情は回復した[12]。秋にはラングはテュービンゲン大学に進学し、偶然ヘッセも同じ町の書店の見習いになることになった。二人は毎週金曜と決めてヘッセの部屋で会い、色々なことを語り合ったようである[13]。もっとも、ラングの学業が忙しくなったのか、話題に接点がなくなったのか、やがて彼の姿はヘッセの視界から消えていく。

そもそもヘッセは何故神学校から逃走したのだろう。この点に関しては、実はあまりはっきりしたことは分かっていない。オットー・ハルトマンの1932年の回想[14]によれば、友人たちに何度も逃走すると予告したにもかかわらず、「そんな勇気などあるまい」と信じてもらえず、その後実際に姿をくらませてしまったのだという。直接のきっかけは案外そんなことだったのかもしれない。しかしこの出来事の背景に潜伏している要因には計り知れない複雑さがありそうである。

一つ言えるのは、『車輪の下』では逃走は次第に高まっていく軋轢の延長上に必然の展開として生起するが、ヘッセの実人生では順序は逆だということである。思いがけない逃走を発端として、潜在していた様々な問題が顕在化し、退校せざるを得ない状態へとヘッセは陥っていく。このような進行の背後で、ヘッセ自身制御しきれない嵐が彼の内面で吹き荒れており、いわば悪魔的なものに突き動かされるようにして、周囲の人々をも様々な形で引き回しつつ、乱脈な青春時代へと突入していくのである。教育体制に留まらず、宗教的な次元をも含めて、彼は硬直した価値体系の押し付けに逆説的な手段で対抗しないではいられない。まるで運命が彼を選んで、破滅の縁を疾走させ、何かの実験を行なおうとでもしているかのように。

秋の風景の中で美神の息吹に触れたと感じて詩作に本気で取りかかり、また文学作品に親しむ中でそこに広大な美的精神的世界を予感し、それに自分の人生を賭けてみたいという思いを固めたのはこのマウルブロンでのことだった。しかしそのような生き方を本能的に突き進むと、どれほど社会と衝突しなければならないかをありありと意識させるようになったのも、この時期の体験だったのである。こうした体験と、それとの内的な対峙がなかったら、ヘッセ文学は全く違った形のものになっていたであ

ろう。マウルブロン体験は作家ヘッセにとって一種の引き金の役割を果たしており、彼はその後の人生を賭けて、ここで刻印された問題に立ち向かっていくのである。そう言う意味で、マウルブロンはヘッセが自分の運命と出会った土地であったとも言えるだろう。

解けない課題

自分にのしかかったこのような問題が何を意味するのかを問うことが、その後のヘッセにとって不可避の課題となる。そしてそれが彼の作家としての初期の在り方を直接に規定している。本気で創作に携わるようになって以来、彼は作品の中で何度も何度も修道院を舞台とする場面を描き続けた。

修道院での美的な体験に親友ヴィルヘルムが関わった姿が 1900 年執筆の『眠られぬ夜』の「第三夜」の部分で描かれていることは上に触れた。その他にも、ヘッセの初期の作品には修道院の影を落とす描写が頻繁に見られるのだが、そんな一つの例を見つつ、初期のヘッセにとってのマウルブロン体験の意味を考えてみよう。それは『エルヴィン』[15] というタイトルの初期の短篇である。その粗筋をまとめてみよう。

私（ヘルマン）にとって修道院学校は、郷愁という感情を初めて抱くようになり、最初に歌を作った土地である。無邪気に遊び回る大方の生徒たちに私は溶け込めず、読書や思索に耽っていた。秋のある日曜、気に入っている湖畔で詩想に耽っていると、級友エルヴィンに邪魔される。語り合ってみると彼もなかなかに空想への性向を持っている。やがて友人同士になる。しかし、生徒たちの間で流行した風刺詩合戦で私たちの友情は揶揄され、特に私は傷つき、エルヴィンはしきりにかばってくれたが、もう心は癒されない。ある春の日の午後、エルヴィンにも決心を告げられないまま、私は修道院から森へ逃げ出し、二度と戻ることはなかった。

一年後エルヴィンから手紙が来て、彼も健康上の理由等から修道院学校を去るという。それから一年間心のこもった文通を続けた後、次の夏にシュヴァルツヴァルトで再会する。彼は、不治の病だがまだ数年間は生きられると言う。3 週間の間、毎日彼を訪ねる。その 2 年後、今度はエルヴィンの自宅に彼を訪問し、数週間滞在させてもらう。彼は世間的な情熱を脱し、その静けさはどんどん増していく。その 1 年後に訪ねた時には彼にはもう私の言葉が分からない。死後、彼が私宛に残した手紙を渡されるのだが、その中には、病気に感謝したい、病気は自分の教師だった、という意味の言葉が綴られている。

1965 年にこの作品を初めて世に出したニノン夫人は、創作年代を 1907 ～ 1908 年

と想定した。しかし、病気への忍従と感謝の姿勢に『ペーター・カーメンツィント』のボッピの原像が含まれている点や、『車輪の下』の内容との重複とその彫琢度などから考えて、それらよりも『エルヴィン』の方が後の作品であることは考えがたい。一方新全集にこの作品を収めたミヒェルスは、早ければ 1899 年、テュービンゲンかバーゼルでの執筆と想定している[16)]。しかし当時の耽美的な筆致を抜け出していることを考えると、そこまで遡ることにも無理があるような気がする。おそらく 1900 年から 1902 年頃、『ペーター・カーメンツィント』の執筆が軌道に乗る前までの執筆と見るのが穏当であろう。

この作品に含まれている様々な要素は、その後のヘッセの作家としての展開を暗示している意味で非常に予兆的である。

修道院での体験は、美の世界との出会い、その方向への予感に引かれるが故の孤独、理解してくれる友人への希求といった要素の絡み合いを本質的な内容として描かれていく。そしてその帰結として「私」の逃走が起こる。こうした枠組み自体は『車輪の下』と正確に重なっていると言ってよい。ところがその後は逃走した「私」ではなく、一年後に肺病故に退校したエルヴィンに焦点を当てて物語は展開される。そしてそこに描かれているのは、飛翔に憧れつつも翼を奪われた青年が勝ち得た、自分の運命に対する穏やかな忍従の心境である。

この「私」と「エルヴィン」の関係を見ていると、その後のヘッセ文学によく現われる「冒険者・旅人」と「忍従者」の、対極的な友人関係の範型が見えてくるように思う。『ペーター・カーメンツィント』におけるペーターとボッピ、『車輪の下』におけるハイルナーとギーベンラート、『ゲルトルート』におけるムオトとクーン、『ロスハルデ』におけるブルクハルトとフェラグート‥‥。ヘッセ自身ボーデン湖畔に半ば隠者的に居を定めて忍従者的な生活を目指したのだが、それに閉塞を感じて 1912 年にベルンに移り、1919 年に市民的・安定的な生活の基盤をいったん放棄するまで、この二極関係の停滞は彼の精神的沈滞の土壌で有り続けるのである。『エルヴィン』でヘッセは「私」の問題を描き切らず、『車輪の下』ではハイルナーの問題を描き切らなかった。この方面の掘り下げが敢行されない限り、マウルブロンで彼にのしかかった重荷は解消されようがなかったのではないだろうか。

マウルブロン体験は、美的な誘惑を通してヘッセを詩人の世界へと促した。しかし同時に世間との乖離と自分の存在の基盤の危うさという、大きな不安定要素をも彼に課したのである。ある意味でその後のヘッセの遍歴は、こうした芸術家の存在基盤の危うさの中で道を模索し続ける歩みであったと言えよう。

１９１４年の訪問

それ以来暫くヘッセはマウルブロンを思い出さないようにしていたように思える。ところが 1914 年になってヘッセはその地を再び訪れてみようと思い立ち、6 ～ 7 月頃にそれを実行する。

神学校を去って以来、調べの付く限りでヘッセは 3 度マウルブロンを訪問している。その 1 度目がこの時であり、22 年ぶりの訪問である。自分の人生を暗い方向にねじ曲げたこの思い出の地を彼が訪ねたくなかったことはよく理解できる。ならば一体何故この時期にマウルブロンを訪問する気になったのだろうか。おそらく彼は、精神的閉塞の中で、内面に新たなものの蠢きを感ずる時期にさしかかっていたのではないだろうか。上述のように 1912 年にヘッセはボーデン湖畔での生活を切り上げ、新進作家の素朴な夢は一度無に帰し、全ては振り出しに戻ったような状況になっていた。1912 年から 1913 年初頭にかけて執筆した『ロスハルデ』では「停滞を打破せねば」という主題が、濃厚に作品全体に浸透している。

ところで、同じ 1914 年の初夏、マウルブロンを訪ねる直前頃に、ヘッセは戦争を予示するような不思議な夢を見て、それを『神々の夢』というエッセイに描いている[17]。黙示的な不気味な心象が重ねられた後、最後には戦争の神まで立ち現われるこの夢は、一種の「予知夢」として解釈してみたい欲求にもかられる内容を持っている。いずれにせよ、内外共に調和は崩れ行き、新生への可能性が有り得るのかどうかの切羽詰まった探求が必要な状況に彼は陥っていたのである。そんな中で久しぶりにマウルブロンを訪ねたことには、自分の歩みの出発点を見つめ直したいという意識が働いていたのであろう。

この体験を彼は『マウルブロンの回廊の噴水』[18]というエッセイに綴っているが、その時の感情の振幅は回廊の礼拝堂にある噴水を目にした時に極みに達する。

Viele edle Gewölbe haben mich beschattet, viele schöne Gesänge mich erregt und mich getröstet, viele Brunnen haben mir, dem Wanderer, gerauscht. Aber dieser Brunnen ist mehr, unendlich mehr, er singt das Lied meiner Jugend, er hat meine Liebe gehabt und meine Träume beherrscht in einer Zeit, da jede Liebe noch tief und glühend, da jeder Traum noch ein Sternhimmel voll Zukunft war. Was ich vom Leben hoffte, was ich zu sein und zu schaffen und zu dulden dachte, was von Heldentum und Ruhm und heiliger Künstlerschaft meine ersten Lebensträume erfüllte und bis zum Schmerz mit Fülle überquoll, das alles hat dieser Brunnen mir gesungen, das hat er belauscht und beschützt.
Und ich hatte ihn vergessen!

これまで私は多くの高貴な穹窿の影に休み、多くの美しい歌に感動と慰謝を得、多くの噴水が旅人である私に囁きかけてくれた。しかしこの噴水はそれ以上である。無

限にそれ以上である。あらゆる愛がまだ深くて燃えるようで、あらゆる夢がまだ未来に溢れた星空であったあの時期に、この噴水は私の青春の歌を歌い、私の愛を所有し、私の夢を支配していた。私が人生に期待したもの、私がそうなろうとし、作ろうとし、耐えようとしたもの、英雄的な冒険や名誉や神聖な芸術性で私の初めての人生への夢を満たし、そして痛いまでに充満して湧き溢れたもの、その全てをこの噴水は私に歌ってくれ、その全てに耳傾け、そして護っていてくれたのだ。

ところが私の方では、この噴水を忘れてしまっていた。

詰まるところ、彼はこの一つの噴水に、超時代的に人間の生に働きかけ続ける一つの象徴を見出したのである。ヘッセは、自分がある大きな精神共同体の一員であることを、ここで予感し直したと言ってよかろう。

１９２１年の訪問

2 度目の訪問は 1921 年 10 月のことだった。大戦終了直後の 1919 年にヘッセはスイス南部のモンタニョーラに移住し、しばらくは芸術の世界に燃焼し尽くそうとする生活を送り、ドイツを訪れることは避けていた。そんな彼が、戦後のドイツの印象を確かめようと思い立ったのがこの時の旅行だった。

同郷の友エーミール・モルトが自動車を出してくれ、やがて 2 度目の結婚の相手となるルート・ヴェンガーを伴っての旅で、旧知の人々を訪ねつつ、シュトゥットガルト、カルプ等を巡っている。マウルブロンには 3 日間も逗留しているが、その前の訪問の時の悲壮な透明感と比べるとこの時は精神的に落ち着きがなかったようで、印象をエッセイに映し出すこともしていない。彼が過渡期にあったことが感じられる[19)]。

１９２８年の訪問

3 度目は 1928 年 3 月。中年に達して以来、体調的には持続的に下降していたにもかかわらず、この時の訪問には何故か若やいだ新生の息吹のようなものが感じられる。ちょうど『ナルチスとゴルトムント』の執筆期に当たり、同行者は、まだ結婚はしていなかったが、当時蜜月のような関係にあったニノン・ドルビンだった。

冬期の居住地としていたチューリヒを 3 月上旬に出発し、シュトゥットガルト、カルプ、マウルブロンを含め、南西ドイツをかなり広汎に移動し、それからヴァイマルで朗読会を開き、そしてベルリンにまで足を伸ばしている。ニノンはそこからパリへ向かい、ヘッセ自身は 4 月 10 日に飛行機でシュトゥットガルトに戻り、さらにチュ

ーリヒまで飛行している[20]。

この時の旅行では、ヴュルツブルクでティルマン・リーメンシュナイダーの聖母像に感銘を受けたことも目を引く[21]。ニノンという新しい女性の理解者に包摂されつつ、造形芸術家としてのゴルトムント像を深めていったこの旅行は、晩年のヘッセの作品世界の展開すべき方向を暗示しているように思う。『ナルチスとゴルトムント』でヘッセはマウルブロンをマリアブロン修道院の姿に昇華させているわけだが、そこには、個に過酷な運命を強いたことを糾弾する『車輪の下』の調子はもう無い。

晩年

その後ヘッセは再びマウルブロンを訪ねることはなかったようだが、マウルブロンの記憶との内的な対話は息長く続けられた。その中でマウルブロンのイメージは「個を押し潰す圧制的な教育機関」から、「精神文化を伝統として受け継いでいく、求道性に支えられた教団」といった様相を次第に強めていく。30年代以降の作品世界は、キリスト教的伝統とそれに則った教育との対峙がなければおおよそ構想不可能の世界だったはずである。

ヘッセは既存の宗教団体をそのまま肯定する人ではなかったが、彼の世界は本質的に「求道性によって繋がれた少数の人々の連携にユートピア実現の可能性を託する」といった側面を持っている。マウルブロンのイメージは、そのような意味で、未来への希望の象徴へと転じていったと言えそうである。

晩年に至って、マウルブロンやゲッピンゲン時代[22]の級友たちとのヘッセの交わりは、却って深まっていく。長らく連絡の途絶えていた友との関係の結び直しの例も多く、彼らと共有する世界はますます大切なものとなっていくようである。様々な人々の思い出が小品の中で蘇らされ、様々な人々との再会が実現されていく。

1914 年の訪問の折には教官としてマウルブロンでヘッセを迎え、『ニュルンベルクへの旅』で描かれた 1925 年の旅の際にはブラウボイレンで彼をもてなし、以後も何度か面会の機会を持ったヴィルヘルム・ヘッカー[23]。

20 年代半ばに親交を結び直し、以後親密な文通を続け、『ガラス玉遊戯』執筆の折にはラテン語の部分で力を貸したフランツ・シャル[24]。 ── 彼はギムナージウムの教師をしていたが、その政治信条故に、1 年間の収監も含めナチに迫害され、1943 年に命を落とした。

同じく 20 年代に親交が復活し、1952 年に亡くなるまで頻繁な文通を続け、ヘッセに古き良きシュヴァーベン性を体現する人物と目されたオットー・ハルトマン[25]（ゲッピンゲン市長）。

第 2 次大戦後に親交が復活し、ペーター・ズーアカンプが 1950 年に自分の出版社を起こすに当たり、ヘッセの紹介で彼の相談役となって重要な役割を果たした、弁護士のエドゥムント・ナッター[26]。

40 年代後半に親交を結び直し、文通相手の中でも特に独創的な人間としてヘッセに高く評価されたカール・デッティンガー[27]（ビーベラッハの裁判官）。

これも 40 年代末に連絡が復活し、その著書『ヴュルテンベルク教会史』（1949 年）をヘッセが高く評価したハインリヒ・ヘルメリンク[28]（キール、ボン、マールブルク大学の教会史教授を歴任）。

1950 年代に親交の復活した、牧師で、神学校長も務めたハンス・フェルター[29]。

....

── 晩年の回想的なエッセイの中では、彼らにはしばしば主役的な位置が与えられており、ゲッピンゲンやマウルブロンで刻印されたものは、懐かしい魂の故郷の色合いを帯びるまでになっていく。そして、これらの人々が一人また一人と亡くなっていくのを目にしながら、ヘッセはやがて終わりを迎える自分の人生の意味をしみじみとかみしめていた。

ヘッセ自身は思いの外長生きし、85 年の人生を全うすることができた。これらの級友たちのうち彼よりも後まで生き長らえたのはハンス・フェルターとエドゥムント・ナッターの 2 人だけだったようで、1962 年 8 月のヘッセの葬儀に際しては、ハンス・フェルターはヘッセが葬られたモンテニョーラの聖アッボンディオ教会まで足を運び、弔辞を述べている[30]。

ヘッセにとってのマウルブロン

マウルブロンから逃走した際、祖父ヘルマン・グンデルトがをれを「天才旅行」と呼んで包容力を持って受け止めてくれたことを、晩年のヘッセは『祖父のこと』という公開書簡の中で感謝の気持ちを込めて回想している。ところでこの祖父は、ヘッセの目から見て、マウルブロンをも含めたシュヴァーベンの精神風土の体現者でもあった。『祖父のこと』から一部分を引用してみよう[31]。

In diesem Großvater, bei dessen Tode ich sechzehnjährig war, habe ich nicht nur einen weisen und unbeschadet seiner großen Gelehrsamkeit sehr menschenkundigen alten Mann kennen gelernt, sondern auch einen Nachklang, eine unter Frömmigkeit und Dienst am Reich Gottes etwas verborgene, aber doch sehr lebendig gebliebene Erbschaft von der wunderlich aus materieller Enge und geistiger Großartigkeit gemischten Schwabenwelt, die in den schwäbischen Lateinschulen, in den evangelischen Klosterseminaren und im berühmten

Tübinger "Stift" sich gegen zwei Jahrhunderte lang erhalten und immerzu mit wertvoller Tradition bereichert und ausgedehnt hat. Dies ist nicht bloß die Welt der schwäbischen Pfarrhäuser und Schulen, zu der auch Männer von großem Geist und vorbildlicher Seelenzucht wie Bengel, Oetinger, Blumhardt gehört haben, sondern in der auch Hölderlin, Hegel, Mörike großgeworden sind.

その死の時に私が 16 歳だったこの祖父において、私は単に賢くてその大変な学識にもかかわらず人間通だった一人の老人を知ったのみならず、物質的な狭さと精神的な壮麗さが奇妙に混合されてできているシュヴァーベンの世界の、残響と、敬虔さと神の国への奉仕の下に幾分隠されているが、しかしそれでも生き生きとしたものであり続けているその遺産を、知ったのだった。このシュヴァーベンの世界は、シュヴァーベンのラテン語学校、プロテスタントの修道院学校、そして有名なテュービンゲン大学神学部において、およそ二百年にわたって保たれ、そして常に価値ある伝統によってより豊かにされ、拡大されてきたのだった。これは単に、ベンゲル、エーティンガー、ブルームハルトのような偉大な精神と模範的な心の修養を有する人々も属していたシュヴァーベンの牧師館や学校の世界であるのみならず、そこでヘルダーリン、ヘーゲル、メーリケが成長した世界でもあったのである。

このように、老年のヘッセの目にシュヴァーベンの世界は、一見ひなびた地方的宗教性に閉じられているようでいながら、実は広大な精神的広がりを包み込むことのできる懐の深いものとして映っている。第 1 次大戦前に書いた『プレッセルの園亭で』[32] では、精神の闇に落ちた後のヘルダーリンを背景に配し、テュービンゲン大学の学生でありつつその精神性に圧迫を感じる、メーリケと、特にヴァイプリンガーに、困難な人生が待ち受けていることをヘッセは描いている。しかし 74 歳で執筆したこの書簡には、青春のそのような困難さを包含しつつ、もっと高くから展望する視点がある。ここではヘルダーリンとメーリケは地方にあって普遍へと飛翔した、高邁な精神の象徴として言及されている。

『車輪の下』で個を押しつぶす教育機構として捉えられたマウルブロンは、『ナルチスとゴルトムント』に至って、個々人の波乱の運命を遙かに超えて優しく包む容器のような役割を果たすマリアブロン修道院の姿に変容され、さらには『東方への旅』の「結社」、そして『ガラス玉遊戯』の「カスターリエン」のような、人類の精神的営為を包含しようとする人々の共同体のイメージへと展開されていった。

ヘッセが自分のマウルブロン体験を見る目も、それに歩調を合わせて変化していった。波乱の青春の痛みはもちろん残るが、それを遙かに超える次元を暗示し、彼を鍛え、「求める者」としての歩みに指針を与えたこの世界を、晩年のヘッセは感謝の念を持ちつつ回想している。

主要参照文献

Hermann Hesse: Sämtliche Werke 1, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2001. (SW1 と略記)

Hermann Hesse: Sämtliche Werke 6, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2001. (SW6 と略記)

Hermann Hesse: Sämtliche Werke 8, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2001. (SW8 と略記)

Hermann Hesse: Sämtliche Werke 13, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2003. (SW13 と略記)

Hermann Hesse: Gesammelte Briefe 1, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1973. (GB1 と略記)

Hermann Hesse: Die Kunst des Müßiggangs, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1973.

Hermann Hesse: Briefe an Freunde. Rundbriefe 1946-1962, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1977, 102-9.

Hermann Hesse: Gedenkblätter, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1984.

Ninon Hesse (Hrsg.): Hermann Hesse, Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, 1877-1895, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1984. (KJ1 と略記)

Ninon Hesse (Hrsg.): Hermann Hesse, Kindheit und Jugend vor Neunzehnhundert, 1895-1900, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1985. (KJ2 と略記)

Ninon Hesse: Lieber, lieber Vogel. Briefe an Hermann Hesse, ausgewählt und erläutert von Gisela Kleine, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 2000.

Ursla Apel (Hrsg.): Hermann Hesse: Personen und Schlüsselfiguren in seinem Leben, München (Saur) 1989.

Otto Hartmann: Zum Hermann Hesse-Abend, 1932, in: Volker Michels (Hrsg.): Hermann Hesse in Augenzeugenberichten, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1991, S. 27-30.

Martin Pfeifer: Hesse-Kommentar zu sämtlichen Werken, Frankfurt am Main (Suhrkamp) 1990.

Christian Immo Schneider: Hermann Hesse, München (Beck) 1991.

高橋修「ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』の評価を巡って (1) ── その「自伝性」についての検討」(北海道教育大学函館人文学会、『人文論究』、第 54 号、1992 年、所収)

高橋修「ヘルマン・ヘッセ『車輪の下』の評価を巡って (2) ── 「教育批判」と「詩人の受苦」のテーマについての検討」(北海道教育大学函館人文学会、『人文論究』、第 55 号、1993 年、所収)

高橋修「ヘルマン・ヘッセとオイゲーニエ・コルプ」(北海道教育大学函館人文学会、『人文論究』、第 73 号、2004 年、所収)

Hansjörg Ziegler: Maulbronner Köpfe, Maulbronn (Klaus Krüger) 1987.

注

1）高橋（1993）参照。

2）主にKJ1を参照した。

3）Wilhelm Lang（1876-1938）：Maulbronn と Blaubeuren の神学校で学んだ後、1895年に Tübingen 大学に進み、植物学の博士号を取得。後に das Botanische Institut der Landwirtschaftlichen Hochschule in Hohenheim の教授となる。（KJ1:574）

4）二人の交友の生の姿を書簡から読み取ることは難しいが、後の作品には、美的な彫琢は施されつつも、かなり踏み込んでそれが描かれている。特に"Schlaflose Nächte"（1900年2月執筆、1907年に"Hermann Lauscher"に加えられる）の第3夜で Wilhelm は実名で登場し、月光を浴びた夜の修道院で「私」と語らう様が描かれている。（SW1: 294.）

5）KJ1:171f.

6）Ziegler, S. 101.

7）KJ1:194f.

8）Otto Hartmann（1877-1952）：Maulbronn と Blaubeuren の神学校で学んだ後、Tübingen 大学で法律学を学ぶ。弁護士となり、1919年から1933年まで Göppingen 市長を務める。以後ナチにより職を奪われ困窮するが、戦後も州の要職に就いて活躍。（KJ1:570）

9）この時期の遍歴については高橋（2004）参照。

10）Theodor Rümelin（1877-1920）：Maulbronn と Blaubeuren の神学校で学んだ後、Tübingen 大学で1年間ほど神学を学ぶ。以後軍人になる道を模索した後、Stuttgart 工科大学に学び、土木技師となる。（KJ1:574）

11）KJ1:385.

12）KJ1:427.

13）1895年11月20日、Tübingen より両親への手紙（KJ2:34）参照。

14）Hartmann, S. 28.

15）"Erwin", SW6:7-25.

16）SW6:593.

17）"Der Traum von den Göttern", in: Kunst des Müßiggangs, S. 168-72.

18）"Der Brunnen im Maulbronner Kreuzgang", SW13:357-60.

19）Vgl. GB1:483, Pfeifer, S. 55.

20）Ninon Hesse: Lieber, lieber Vogel, S. 179-186.

21）Vgl. "Einst in Würzburg"（1928）, in: Kunst des Müßiggangs, S. 277-81, Pfeifer, S. 400, Schneider, S. 88.

22）Maulbronn に進学する前、1890年2月から1891年7月まで、Hesse は Stuttgart の東方にある Göppingen のラテン語学校に通っていた。この学校は州試験受験への予備

校的な性格を持っており、Maulbronn の級友のうち何人かとはこの時以来の知り合いである。Maulbronn に進学しなかった生徒たちとも、晩年に至って Hesse は再び連絡を取り合うようになる。

23) Wilhelm Häcker (1877-1959) (KJ1:569f.)

24) Franz Schall (1877-1943) (KJ1:574) Schall との交友は"Gedenkblatt für Franz Schall" (1943, in: Gedenkblätter, S. 176-8) で簡略に振り返られている。

25) 注 8)参照。Otto Hartmann は死の 1 週間ほど前の 9 月 21 日から 2 日間 Montagnola の Hesse 宅を訪問しており、その時の様子をヘッセは"Herbstliche Erlebnisse" (1952, in: Briefe an Freunde, S. 120-30) に綴っている。

26) Edmund Natter (1877-1971) : Maulbronn には進学しなかった。(Apel, S. 709)

27) Karl Dettinger (生没年不明) (Apel, S. 169)

28) Heinrich Hermelink (1877-1958) : Maulbronn には進学しなかった。(KJ1:570f.)

29) Hans Völter (1877-1972) (KJ1:576, Apel, S. 980f.) この Hans Völter と前述の Edmund Natter とは 1954 年 7 月に、当時の Hesse の夏の滞在地である Engadin で彼と再会しており、その模様は"Rundbrief aus Sils-Maria" (1954, in: Briefe an Freunde, S. 181-93) に綴られている。Edmund は自分で自動車を運転して先に帰宅するが、Hans とは数日間を共にし、自分たちが生きてきた時代と共にしみじみと回想している。

30) Vgl. Apel, S. 981.

31) "Großväterliches" (1952), in: Briefe an Freunde, S. 106.

32) "Im Presselschen Gartenhaus" (1913), SW8:84-112.

(北海道教育大学函館校助教授)